

Give の構文展開における 2つの方向性

ココネ言語教育研究所

佐藤芳明

構文文法 (Goldberg 1995 等) においては、「二重与格構文 (Ditransitive construction)」における「2つの目的語」は、“recipient (受信者)”と“patient (対象)”とみなされ、後者が前者への“transfer (移送)”の対象と捉えられている (以下、これを Transfer 理論と呼ぶ)。例えば、She gave me a big chunk of chocolate.であれば、me が recipient、a big chunk of chocolate が patient で、後者が前者へ向けての transfer の対象と捉えられるということである。この発想は、一見なんの矛盾もなさそうに見える。実際、この transfer 理論は、構文論においては常識とされるほどに定着しているものである。また、構文論を専門にひもとかないまでも、上の例を She gave a big chunk of chocolate to me.と書き換えられる (そして、この書き換えが同種の構文において一般に可能である) という具合に理解しているとすれば、それはこの Transfer 理論に無意識的に依拠しているということを意味している。つまり、Transfer 理論は、構文論をめぐる言説・信念の体系におけるひとつの土台 (foundation) を形成していると言っても過言ではない。

この Transfer 理論は、しかし、構文論の土台としては決して堅固とは言いきれない危うい要素も孕んでいる。その問題の所在は、今ふれた「書き換え」という発想とつながっている。つまり、「give+名詞+名詞」の構文を、前置詞 to を使って (より一般化すれば、「動詞+名詞+名詞」の構文を、前置詞を使って) 書き換えられるという捉え方である。実際には、「動詞+名詞+名詞」の構文においては、この発想では理解できない用例が多数存在するからだ。

ここで、いわゆる「書き換え」問題の詳細に立ち入る前に、Goldberg (1995) による ditransitive construction の分類を参照してみよう。

Goldberg (1995) による ditransitive construction の分類 :

- Agent causes transfer: *give, hand, pass, throw, toss, bring, take, etc.*
e.g. Bill gave her a book
- Conditional transfer: *guarantee, promise, owe, etc.*
e.g. Bill promised her a book
- Agent prevents transfer: *refuse, deny*
e.g. Bill denied her a book
- Future transfer: *leave, bequeath, reserve, grant, etc.*
e.g. Bill bequeathed her a book.
- Enabling conditions for transfer: *permit, allow*

e.g. Bill allowed her one book

● Intended transfer: *bake, build, make, get, grab, win, earn, etc.*

e.g. Bill wrote her a book

列挙された動詞群と、与えられた例文から、これは、「動詞＋名詞＋名詞」の構文を受容する動詞を、transfer のタイプ（「agent が transfer を引き起こす場合」「条件つきで transfer がなされる場合」「transfer が妨げられる場合」等々）によって分類したものであることが分かる。一見、整然と分類されているように見える。しかし、ここには根本的な問題がある。そもそも、「動詞＋名詞＋名詞」という構文が表象するのは、transfer という概念で捉えられるものなのか。つまり、この分類は、transfer ありきの発想が前提になってしまっているのである。しかしもし、この transfer という概念そのものが検討を要するものであったとしたら、上の分類も、意図された成果を果しえないものになってしまう可能性があるのである。

Transfer 理論の問題とは何か。少し、ひもといってみよう。以下の2文の正誤（a は正しく、b に違和感が生じてしまう）については、どう説明したらよいか。

1-a) She always gives me a headache.

1-b) ? She always gives a headache to me.

意味するところは、「彼女にはいつも悩まされる（彼女のお陰で私はいつも頭が痛い）」ということである。このような状況を表すには、*She always gives me a headache.* と表現するのがふさわしく、これを **gives a headache to me* と前置詞 *to* を使って表現するのは無理がある。このとき、a) の *give* につづく [*me a headache*] の語のつながり（人＋モノ）には、[*me HAVE a headache*] という HAVE 状況が想定されており（これは1つの HAVE 状況なのであって、*me* と *a headache* が2つの別個の目的語である捉えるべきではない）、その HAVE 状況を彼女が常に生み出すというのがこのセンテンスの意味するところである。

ではなぜ、**She always gives a headache to me.* は違和感が生じるのか。それは、ここで用いられている *give A to B* という構文自体の意味が、上の状況を反映するものとは異なっているからである。*give A to B* という構文は、< A を自分のところから出して、B に向ける > という状況を意味する。つまり、まずは対象である A（典型的には「移動可能」なモノ）を自分のところから出して、それを B（典型的には「受け手」である人）に向ける、ということの意味しているのである。しかし、「頭痛」をそのような移動の対象として扱うことはできない。

ここで以下のことに気づかなくてはならない。それは、*give A to B* の構文こそ、構文論で言

われるところの transfer (recipient に向けて patient を transfer する) という概念を的確に表す構文と認められるということである。逆に、「give+名詞+名詞」(更に一般化すれば、「動詞+名詞+名詞」)の方は、transfer (移送) を必ずしも意味するのではなく、むしろ、「名詞 HAVE 名詞」という状況(典型的には、「誰かが何かを HAVE する状況」)を生み出す、という意味合いをもつ構文なのである。つまり、give において、「書き換え」で捉えられていた2つの構文は、実は、意味合いが異なる2つの構文であったということなのである。

具体例に即して確認してみよう。上の a)において、a headache は“transfer”の対象ではなく、me が a headache の“recipient”であるわけでもない。つまり、ここには「移送(移動)」という現象は関与していない。そうではなく、むしろ、「彼女」が原因となって、[he HAVE a headache]という HAVE 状況を結果として生み出す、ということが意味されているのである。一方、b)の構文だと、前置詞 to があるために、まさに transfer を意味してしまう。しかし、そもそも、「頭痛」を自分のところから出して、相手に向けるという具合に、「移送(移動)」させることなどできない。だから、b)の構文は、ここでは不可となるのである。

例を足しておこう。

2-a) Give me a break!

2-b) * Give a break to me!

3-a) He gave me some money.

3-b) She gave some money to me.

2-a)と2-b)の相違は、上の説明をあてはめることで理解できる。「勘弁してくれ!」といった状況を表現する際の英語表現として、Give me a break!は自然だが、* Give a break to me!は違和感がある。それは、[me HAVE a break]という状況を生み出してくれ、という捉え方が自然であるのに対して、「a break を自分(あなた)のところから出して、私に向けてくれ」という具合に「移送(移動)」で捉えることには無理があるからである。一方、3-a)と3-b)はいずれも可能であり、意味的にも大きな差を生まない。それは、[me HAVE some money]の状況を彼女がもたらした、と捉えることも、彼女はチョコレートを自分のところから出して、私に向けた(結果として「私はもらった」)、と捉えることも可能だからである。構文的な意味処理は本来異なっているものの、解釈の結果としてみれば、現実的な意味において、両者の相違はほとんど感得されないということである。

Transfer 理論には、厳密に言うと、以下の2つの問題があるということになる。

1) transfer で捉えられない「動詞+名詞+名詞」の構文を、transfer で論じてしまってい

る。

- 2) Ditransitive construction の書き換え (dative alternation) として捉えられている前置詞構文、つまり、「動詞+名詞+前置詞 (to) +名詞」の構文こそ、transfer という概念を通じてその固有の性質を明確にすべきであるにもかかわらず、それが徹底されていない。

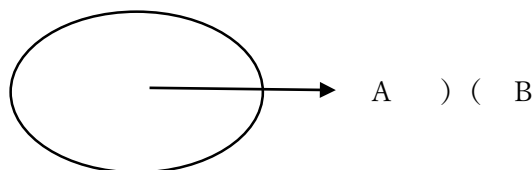
上記の 2) の問題について、以下、具体例を通じてみてみることにしたい。

4. He submitted a report on the matter to the committee.
5. He contributed a lot of money to the fund.
6. Donate some money to the needy.
7. He dedicated his whole life to serving his country.
8. I've been devoting my time and energy to this project.

上記例文 4-8 の動詞は、「動詞+名詞 (A) +to+名詞 (B)」の構文で使用されている。これが give A to B の構文と類縁関係にあることは、直観的に理解しやすいことである。これらの例は、give A to B の transfer (移送 (移動)) 構文のバリエーションとして捉えられるからである。つまり、それぞれの例文における A が“patient”、B が“recipient” (人とは限らないが) に相当し、前者が後者へ向けての transfer の対象として理解され、そのような構文的意味を有しているからこそ、この「動詞+名詞+to+名詞」の構文が使われているのである。

ところで、これらの動詞 (submit, contribute, donate, dedicate, devote) には、「二重目的語構文」はないが、それはなぜか。この現象は、一般にあまり注目されておらず、説明もあまりなされていないように思われる。しかし、これも説明可能な現象である。ひとつ明らかなのは、give A to B が give B A と書き換え可能であるという発想に基づいて、それをこれらの例にあてはめてしまえば、なぜ、これらの例において、いわゆる「二重目的語」構文が許容されないのかが、説明不能になってしまうということである。やはり、ここには前置詞 to を伴う構文でなければ表現できない事態が表されているという気づきが大切である。それは、「動詞+名詞+名詞」の構文が前提とするような HAVE 状況 ([B HAVE A]の状況) ではなく、むしろ、<A を出して、B に向ける>というイメージが前景化しているということである。

「動詞+ A +to+ B」構文のイメージ



典型的にはAはモノ、Bは人であるが、B（人）がA（モノ）を必ずしもわがものとするわけではない（[B HAVE A]の状況が確保されるとは限らない）というのが、この動詞+A+to+Bの構文のニュアンスである。このとき大切なのは、事実問題としてBがAをHAVEするか否かということが問題となっているのではなく、あくまでも、表現の焦点がどこに置かれるかというプロファイリング（場面の切り取り）の問題として捉えることが大切である。

ところでこの発想は、コトバのやりとりを表す動詞（say, explain, suggest）においても応用可能である。

9. Say hi to your mom.
10. I explained the matter to her.
11. We suggested an idea to the committee.

例えば、Say hi to your mom.と言う代わりに、*Say your mom hi.とは言わないし、I explained the matter to her.とする代わりに、*I explained her the matter.とはしない。これらの動詞が「動詞+名詞+名詞」の構文で使われないのはなぜか。ここでも、HAVE状況ではなく、むしろ、<Aを出してBに向ける>というtransferがクローズアップされているためであると考えられる。Sayは、発言の内容自体を対象とするが、相手に何かを伝えるという意味を必ずしも表さない（それはtellの意味あいである）。Explainも同様に、事柄を説明することにフォーカスされるものの、その説明を聞く相手はその内容をHAVEすることが必ずしもイメージされるわけではない。Suggestも、「相手が拒む可能性を認めたいうえで、何かを提案する」といった意味合いであるから、まず自分のところからアイディアを出して、それを相手へ向けるという手続き的な表現がフィットするのであり、逆に、相手がそのアイディアをわがものとするを前提とするような構文はとらないという具合に理解することが可能である。

上記4～11の例は、いずれも「動詞+名詞+名詞」の構文はとらずに、「動詞+A+to+B」の構文をとる。これらは、give A to Bと関連づけて構文ネットワークとして捉えることが可能である。が、その際のgive A to Bというのは、give B Aとは構文的意味が明確な異なりをもつ構文であるという認識が不可欠である点を確認しておきたい。

今ひとつ、Transfer理論の問題点を浮き彫りにする傍証となり得る例を加えておきたい。以下は、Ditransitive constructionの例であるが、これらの例において、transferという現象を感得することが可能であろうか。

12. It **cost** me more than 5,000 yen to repair the iPhone.

13. Your phone call **saved** me the trouble of calling on you.

上記の2例では、使われている動詞(cost, saved)の意味に照らして、meが受け手(recipient)となるような、transfer(移送(移動))は含意されていない(上のGoldberg(1995)の分類で言えば、“Agent prevents transfer: refuse, deny”が類縁項と感じられるかもしれない(これらの動詞もtransferでは把握し得ないが))。つまり、transferという概念では把握できない動詞が、Ditransitive constructionを受容する動詞の中には存在するという事実が確認されるのである。しかし、これらの動詞においても、transferという概念に拠らず、むしろ、HAVE状況を(図式的に)想定することで、解釈が可能となる。これらの例では、結果としてHAVEするわけではないが、[me HAVE more than 5,000 yen]だとか[me HAVE the trouble of calling you]というHAVE状況が図式的に(ニュートラルなイメージで)想定されるからこそ、VP+NP+NP構文が要請されるという具合に捉えることができるのである。

本稿では、transfer理論への批判的検討を通じて、giveの構文可能性と、そこから派生的に捉えられる動詞構文の捉え方を見直してきた。動詞構文を考える際に、Giveから展開される構文として注目したいのは、以下の2つの系統である。

- i) 「give+名詞+名詞」 --- 「名詞 HAVE 名詞」という状況を生み出す
→ 「動詞+名詞+名詞」の構文一般へ
- ii) 「give+名詞(A)+to+名詞(B)」 --- 「Aを出して、Bに向ける」
→ 「動詞+名詞(A)+to+名詞(B)」の構文一般へ
(前置詞“to”を「前置詞一般」とすれば、構文スキーマがより一般化される)

上記2種の構文は、どのような動詞で受容されるのか。つまり、動詞の構文受容性という観点からすれば、以下の3つの可能性が認められる。

- 1) 「動詞+名詞+名詞」の構文でも、「動詞+名詞+前置詞+名詞」の構文も可能。
e.g. give, send, lend, teach, show, tell, etc.
- 2) 「動詞+名詞+名詞」の構文は可能だが、「動詞+名詞+前置詞+名詞」の構文はない。
e.g. cost, save
- 3) 「動詞+名詞+前置詞(to)+名詞」の構文は可能だが、「動詞+名詞+名詞」の構文はない。
e.g. contribute, devote, dedicate, donate, explain, submit, suggest, etc.

これらの構文と動詞の相性については、意味的な動機づけの観点からはあまり説明されて

こなかったように思われる。その理由として考えられるのは、1) の事例（両構文が受容される）を「書き換え (dative alternation)」という発想で議論することに関心が向かうあまり、2) や 3) の事例の意義を問うことには十分な意識が払われてこなかったことが一因として考えられる。そのギャップを埋めることを企図するというのが、この小論を記した動機である。